



Title	理想と現実の入れ替え : 川島理一郎の広東従軍行
Author(s)	陳, 鶯
Citation	デザイン理論. 2022, 80, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89278
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

理想と現実の入れ替え

川島理一郎の広東従軍行

陳 鶯 京都工芸繊維大学大学院在学

はじめに

本発表は、日本工房が南支派遣軍の出資により中国・広東で発行した英文の対外宣伝グラフ月刊誌『CANTON』研究の一環として、『CANTON』1巻3号(1939年6-7月号)に掲載された画家の川島理一郎(1886-1971)の絵入りエッセイ「My Impression of Canton」(私の広東印象)を主な考察対象とする。

欧米、東アジア各国で豊富な活動経験を持つ洋画家の川島は、1939年初頭に陸軍省の囑託を受けて広東に派遣され、1ヶ月間滞在した。川島の広東従軍の成果として、「第一回聖戦美術展」(1939年7月)に出品された《広東大観》原題《占領即建設の広東》と「第三回新文展」(1939年10, 11月)に出品された《施米》の二点の油絵、及びその広東従軍記を収録した著書『北支と南支の貌』(東京: 龍星堂, 1940年)が有名だが、雑誌『CANTON』に寄稿したこの記事は今まで研究対象として取り上げられていなかった。

「私の広東印象」が注目に値する理由は、下記の二点でこれが興味深いためである。まず、この記事は川島の唯一欧米の読者に向けて書いた広東に関する言説であり、日本人の目に映った広東像を初めて欧米の読者に伝える記事でもあった点、そして、それは広東攻略の勝利者であり広東の新しい占領者である日本人から、古来よりこの地で勢力を伸ばしていた欧米人への発信だったとも看做される点である。本発表は川島が「私の広東印象」で発信した広東像、及びその広東像に込められたイデオロギーを明らかにすることを目的とする。

記事分析: 「私の広東印象」

川島理一郎が雑誌『CANTON』を通して欧米の読者に向けて披露した「広東印象」は、現地取材という形を取っていたが、実のところ、現地で見たものを忠実に伝えるというより、その中から自分が想定した「支那自身の特色」と合致する部分だけを意識的にピックアップして、欧米の読者に伝えようとしたことが分かった。

川島は日本国内で発表した従軍記では、広東が彼の眼に映った通りに、「戦火を蒙つた欧米依存な近代化都市」として記録した。一方、欧米向けには日本国内向けと共通な話題や画像を利用しつつ、真逆の広東像を作り上げた。まず、戦争の痕跡を丁寧に排除することにより、日本軍占領下の広東の穏やかな雰囲気や強調した。そして、現地の住民の様子や風習の一部だけをピックアップし記述することにより、広東人の前近代的な生活様式や未開な面だけを伝えた。さらに、視覚の面では、筆墨趣味に富む画風や押印などあらゆる「東洋的な」要素を利用し、広東の「東洋らしさ」ないし「中国らしさ」を際立たせた。現実と異なることを認識しながらも、川島は、この穏やかで「中国」らしく前近代的な広東像こそが西洋に対して見せるべき姿と考えたのではないかと。

川島理一郎の広東従軍行とその戦争画観

陸軍省保存用の広東攻略の戦争記録画を創作するために広東に訪れた川島は、広東に赴く前に複数の文章でその戦争画観を詳しく述べており、この広東従軍も川島の熟考した戦争画観の実践とし

て見做される。川島の戦争画に関する言説の中に見られる「広義戦争画」という概念は特に注目すべきである。川島は戦争画の要義が画題にあるのではなく、「聖戦の目的」の表現に帰すると主張した。川島の「広義戦争画」の概念を理解してこそ、彼の中国従軍時期の作品における穏やかな風景の描写に含まれた政治的隠喩を読み取ることができる。

「私の広東印象」で示されたような、現実の広東と川島が理想とする広東を入れ替える傾向は、川島の広東従軍時期の《広東大観》や《施米》などの油絵でも見られる。《広東大観》と《施米》は一見広東風景の忠実な再現であるが、実は「聖戦の目的」を表現するために、意識的に描写対象が選別、配置された「理想的な」風景画だった。例えば、先行研究で見落とされた《広東大観》の画面中央に据える発電所や遠景の山に対する描写は、実は日本軍の広東における行動方針を表現するために工夫をめぐらしたものである。そして、《広東大観》の前景や《施米》の背景にある伝統中国風の建物も、広東の街の「中国らしさ」を極力見せるために意図的に配置された。さらに、《施米》は油絵であるが、その画風は「私の広東印象」の水墨スケッチとかなり接近し、川島の明快で重厚な代表的な作風と大きく異なっている。広東を前近代的な中国の街として表現するために、ダブローでも「東洋的な」表現方法を積極的に模索する当時の川島の姿も浮かび上がってきた。

川島理一郎が描いた広東に見る東洋意識

最後は、東洋意識の視点で、川島が「聖戦の目的」を果たすために、意識的にわざと欧米化、近代化された実際の広東と真逆の「東洋的な」画風や「中国らしい」描写対象を採用した理由を明らかにした。

川島は早くから欧米各国や東アジアで豊富な活動経験を持っていたが、広東はその経験から逸脱した存在であり、川島に強烈な刺激と困惑感を与

えた。そのため、川島が意識的に広東像を見せる時に、欧米化した実際の近代都市より、日本と古くから繋がりを持つ「中国」ないし「東洋」の一部としての広東を強調する意図もあったと考えられる。そして、この欧米化された実際の「広東」と川島が理想とする「中国」との入れ替えにより、広東における日本の欧米への対抗意識が不覚にも反映されているのではないか。

おわりに

本発表は、雑誌『CANTON』に掲載された川島理一郎の記事「私の広東印象」を原点として、川島が国策宣伝雑誌の場で欧米向けに発信した広東像、並びに川島の広東従軍時期の創作活動と思想を考察した。

現実の戦火を蒙った欧米化した広東が、穏やかで前近代的な「中国」らしい街として表現されているという点で、今まで研究対象として取り上げられてこなかった「私の広東印象」は、川島の広東を描いた二点の戦争画の名作と共通している。また、このようなイメージの入れ替えは川島が「聖戦の目的」を表現するために意識的に使用した手段である。広東という東洋でありながら東洋より西洋とはるかに緊密に繋がっていた環境の中で、川島が自分又は日本のあるべき位置を探求した結果、欧米化された実際の「広東」と日本人が理想とする穏やかで前近代的な「中国」を入れ替え、広東の欧米との距離を強調し、東洋的文脈の中で見直すべきだと主張することにより、日本の広東進出の正当性を裏付けたのである。

〔註〕

本発表で引用されている1930-40年代の資料には現在使用されることが不適切な用語も含まれているが、歴史的文献として尊重し、原本のままとした。